

月例経済報告

(令和元年7月)

—景気は、輸出を中心に弱さが続いているものの、緩やかに回復している。—

先行きについては、当面、弱さが残るものの、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響に一層注意するとともに、中国経済の先行き、海外経済の動向と政策に関する不確実性、金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。

令和元年7月23日

内閣府

[参考]先月からの主要変更点

	6月月例	7月月例
基調判断	<p>景気は、輸出や生産の弱さが続いているものの、緩やかに回復している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人消費は、持ち直している。 ・設備投資は、このところ機械投資に弱さもみられるが、緩やかな増加傾向にある。 ・輸出は、弱含んでいる。 ・生産は、このところ弱含んでいる。 ・企業収益は、高い水準で底堅く推移している。企業の業況判断は、製造業を中心に慎重さがみられる。 ・雇用情勢は、着実に改善している。 ・消費者物価は、このところ緩やかに上昇している。 <p>先行きについては、当面、弱さが残るものの、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響に一層注意するとともに、中国経済の先行き、海外経済の動向と政策に関する不確実性、金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。</p>	<p>景気は、輸出を中心に弱さが続いているものの、緩やかに回復している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人消費は、持ち直している。 ・設備投資は、このところ機械投資に弱さもみられるが、緩やかな増加傾向にある。 ・輸出は、弱含んでいる。 ・生産は、このところ横ばいとなっているものの、一部に弱さが続いている。 ・企業収益は、高い水準で底堅く推移している。企業の業況判断は、製造業を中心に慎重さが増している。 ・雇用情勢は、着実に改善している。 ・消費者物価は、このところ緩やかに上昇している。 <p>先行きについては、当面、弱さが残るものの、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響に一層注意するとともに、中国経済の先行き、海外経済の動向と政策に関する不確実性、金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。</p>
政策態度	<p>政府は、東日本大震災からの復興・創生及び平成28年(2016年)熊本地震からの復旧・復興に向けて取り組むとともに、デフレからの脱却を確実なものとし、経済再生と財政健全化の双方を同時に実現していく。</p> <p>このため、「経済財政運営と改革の基本方針2019」、「成長戦略実行計画」等を取りまとめる。さらに、全ての世代が安心でき、活躍できる「全世代型社会保障制度」を実現するため、労働制度をはじめ制度全般の改革を進める。また、10月に予定されている消費税率の引上げを控え、経済財政運営に万全を期す。</p> <p>平成30年度補正予算及び臨時・特別の措置を含む令和元年度予算を迅速かつ着実に執行する。</p> <p>好調な企業収益を、投資の増加や賃上げ・雇用環境の更なる改善等につなげ、地域や中小・小規模事業者も含めた経済の好循環の更なる拡大を実現する。</p> <p>日本銀行には、経済・物価情勢を踏まえつつ、2%の物価安定目標を実現することを期待する。</p>	<p>政府は、東日本大震災からの復興・創生及び平成28年(2016年)熊本地震からの復旧・復興に向けて取り組むとともに、デフレからの脱却を確実なものとし、経済再生と財政健全化の双方を同時に実現していく。</p> <p>このため、6月21日に「経済財政運営と改革の基本方針2019～『令和』新時代：『Society 5.0』への挑戦～」、「成長戦略実行計画」等を閣議決定した。今後、これらに基づき、潜在成長率の引上げによる成長力の強化に取り組むとともに、成長と分配の好循環の拡大を目指す。さらに、誰もが活躍でき、安心して暮らせる社会づくりのため、全世代型社会保障を実現する。また、10月に予定されている消費税率の引上げを控え、経済財政運営に万全を期す。</p> <p>平成30年度補正予算及び臨時・特別の措置を含む令和元年度予算を迅速かつ着実に執行する。</p> <p>日本銀行には、経済・物価・金融情勢を踏まえつつ、2%の物価安定目標を実現することを期待する。</p>

	6月月例	7月月例
貿易・サービス収支	おおむね均衡している	赤字となっている
生産	このところ弱含んでいる	このところ横ばいとなっているものの、一部に弱さが続いている
業況判断	製造業を中心に慎重さがみられる	製造業を中心に慎重さが増している
国内企業物価	このところ横ばいとなっている	このところ緩やかに下落している

(注) 下線部は先月から変更した部分。

月例経済報告

令和元年 7月

総論

(我が国経済の基調判断)

景気は、輸出を中心に弱さが続いているものの、緩やかに回復している。

- ・個人消費は、持ち直している。
- ・設備投資は、このところ機械投資に弱さもみられるが、緩やかな増加傾向にある。
- ・輸出は、弱含んでいる。
- ・生産は、このところ横ばいとなっているものの、一部に弱さが続いている。
- ・企業収益は、高い水準で底堅く推移している。企業の業況判断は、製造業を中心に慎重さが増している。
- ・雇用情勢は、着実に改善している。
- ・消費者物価は、このところ緩やかに上昇している。

先行きについては、当面、弱さが残るものの、雇用・所得環境の改善が続くなかで、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響に一層注意するとともに、中国経済の先行き、海外経済の動向と政策に関する不確実性、金融資本市場の変動の影響に留意する必要がある。

(政策の基本的態度)

政府は、東日本大震災からの復興・創生及び平成28年(2016年)熊本地震からの復旧・復興に向けて取り組むとともに、デフレからの脱却を確実なものとし、経済再生と財政健全化の双方を同時に実現していく。

このため、6月21日に「経済財政運営と改革の基本方針2019～『令和』新時代：『Society 5.0』への挑戦～」、「成長戦略実行計画」等を閣議決定した。今後、これらに基づき、潜在成長率の引上げによる成長力の強化に取り組むとともに、成長と分配の好循環の拡大を目指す。さらに、誰もが活躍でき、安心して暮らせる社会づくりのため、全世代型社会保障を実現する。また、10月に予定されている消費税率の引上げを控え、経済財政運営に万全を期す。

平成30年度補正予算及び臨時・特別の措置を含む令和元年度予算を迅速かつ着実に執行する。

日本銀行には、経済・物価・金融情勢を踏まえつつ、2%の物価安定目標を実現することを期待する。

1. 消費・投資等の需要動向

個人消費は、持ち直している。

個人消費は、持ち直している。実質総雇用者所得は緩やかに増加している。また、消費者マインドは弱含んでいる。

需要側統計（「家計調査」等）と供給側統計（鉱工業出荷指数等）を合成した消費総合指数は、5月は前月比0.2%減となった。個別の指標について、最近の動きをみると、「家計調査」（5月）では、実質消費支出は前月比5.5%増となった。販売側の統計をみると、「商業動態統計」（5月）では、小売業販売額は前月比0.4%増となった。新車販売台数及び家電販売は、持ち直している。旅行は、持ち直しの動きがみられる。外食は、緩やかに増加している。

先行きについては、雇用・所得環境が改善するなかで、持ち直しが続くことが期待される。

設備投資は、このところ機械投資に弱さもみられるが、緩やかな増加傾向にある。

設備投資は、このところ機械投資に弱さもみられるが、緩やかな増加傾向にある。需要側統計である「法人企業統計季報」（1-3月期調査）でみると、2019年1-3月期は前期比1.1%増となった。業種別にみると、製造業は同1.7%減、非製造業は同2.8%増となった。機械設備投資の供給側統計である資本財総供給（国内向け出荷及び輸入）は、一部に弱さがみられるものの、おおむね横ばいとなっている。ソフトウェア投資は、緩やかに増加している。

「日銀短観」（6月調査）によると、全産業の2019年度設備投資計画は、増加が見込まれている。「日銀短観」による企業の設備判断は、不足感がみられる。先行指標をみると、機械受注は、おおむね横ばいとなっている。建築工事費予定額は、緩やかに増加している。

先行きについては、高水準の企業収益や成長分野への対応等を背景に、緩やかに増加していくことが期待される。

住宅建設は、おおむね横ばいとなっている。

住宅建設は、おおむね横ばいとなっている。持家の着工は、このところ増加している。貸家の着工は、緩やかに減少している。分譲住宅の着工は、おおむね横ばいとなっている。総戸数は、5月は前

月比3.3%減の年率90.0万戸となった。なお、首都圏のマンション総販売戸数は、このところ弱含んでいる。

先行きについては、当面、横ばいで推移していくと見込まれる。

公共投資は、底堅い動きとなっている。

公共投資は、底堅い動きとなっている。5月の公共工事出来高は前月比0.9%増、6月の公共工事請負金額は同8.0%減、5月の公共工事受注額は同3.3%減となった。

公共投資の関連予算をみると、国の平成30年度一般会計予算では、補正予算において約1.6兆円の予算措置を講じており、補正後の公共事業関係費は、前年度を上回っている。令和元年度当初予算では、公共事業関係費について、一般会計では前年度当初予算比15.6%増（臨時・特別の措置分を含む）としている。令和元年度地方財政計画では、投資的経費のうち地方単独事業費について、前年度比5.2%増としている。

先行きについては、関連予算の執行により、底堅く推移することが見込まれる。

輸出は、弱含んでいる。輸入は、おおむね横ばいとなっている。貿易・サービス収支は、赤字となっている。

輸出は、弱含んでいる。地域別にみると、アジア及びEU向けの輸出は、弱含んでいる。アメリカ及びその他地域向けの輸出は、おおむね横ばいとなっている。先行きについては、海外景気の緩やかな回復等を背景に、持ち直していくことが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響や中国経済の先行きなど海外経済の不確実性に留意する必要がある。

輸入は、おおむね横ばいとなっている。地域別にみると、アジア、アメリカ及びEUからの輸入は、おおむね横ばいとなっている。先行きについては、持ち直していくことが期待される。

貿易・サービス収支は、赤字となっている。

5月の貿易収支は、輸出金額が減少し、輸入金額が増加したことから、赤字幅が拡大した。また、サービス収支は、赤字に転じた。

2. 企業活動と雇用情勢

生産は、このところ横ばいとなっているものの、一部に弱さが続いている。

鉱工業生産は、このところ横ばいとなっているものの、一部に弱さが続いている。鉱工業生産指数は、5月は前月比2.0%増となった。鉱工業在庫指数は、5月は前月比0.5%増となった。また、製造工業生産予測調査によると、6月は同1.2%減、7月は同0.3%増となることが見込まれている。

業種別にみると、輸送機械は緩やかに増加している。生産用機械はおおむね横ばいとなっている。電子部品・デバイスは減少している。

生産の先行きについては、中国経済など海外経済の動向に留意する必要があるが、持ち直しに向かうことが期待される。

また、第3次産業活動は、緩やかに増加している。

企業収益は、高い水準で底堅く推移している。企業の業況判断は、製造業を中心に慎重さが増している。倒産件数は、おおむね横ばいとなっている。

企業収益は、高い水準で底堅く推移している。「法人企業統計季報」(1-3月期調査)によると、2019年1-3月期の経常利益は、前年比10.3%増、前期比13.2%増となった。業種別にみると、製造業が前年比6.3%減、非製造業が同18.4%増となった。規模別にみると、大・中堅企業が前年比11.2%増、中小企業が同8.6%増となった。「日銀短観」(6月調査)によると、2019年度の売上高は、上期は前年比1.7%増、下期は同0.6%増が見込まれている。経常利益は、上期は前年比7.9%減、下期は同0.4%減が見込まれている。

企業の業況判断は、製造業を中心に慎重さが増している。「日銀短観」(6月調査)によると、「最近」の業況は、「全規模非製造業」ではおおむね横ばいであったが、「全規模製造業」が低下したことから、「全規模全産業」は低下した。9月時点の業況を示す「先行き」は、「最近」に比べ慎重な見方となっている。また、「景気ウォッチャー調査」(6月調査)の企業動向関連DIによると、現状判断及び先行き判断は変わらなかった。

倒産件数は、おおむね横ばいとなっている。5月は695件の後、6月は734件となった。負債総額は、5月は1,074億円の後、6月は869億円となった。

雇用情勢は、着実に改善している。

雇用情勢は、着実に改善している。一方で、人手不足感が高い水準となっている。完全失業率は、5月は前月と同水準の2.4%となった。労働力人口、就業者数及び完全失業者数は減少した。

雇用者数は緩やかに増加している。新規求人数及び有効求人倍率は横ばい圏内で推移している。製造業の残業時間は横ばい圏内で推移している。

賃金をみると、定期給与及び現金給与総額は緩やかに増加している。

「日銀短観」（6月調査）によると、企業の雇用人員判断は、不足感が引き続き強い。

雇用情勢の先行きについては、着実に改善していくことが期待される。

3. 物価と金融情勢

国内企業物価は、このところ緩やかに下落している。消費者物価は、このところ緩やかに上昇している。

国内企業物価は、このところ緩やかに下落している。6月の国内企業物価は、前月比0.5%下落した。輸入物価（円ベース）は、下落している。

企業向けサービス価格の基調を「国際運輸を除くベース」でみると、横ばいとなっている。

消費者物価の基調を「生鮮食品及びエネルギーを除く総合」でみると、このところ緩やかに上昇している。6月は、連鎖基準、固定基準ともに前月比0.0%となった。なお、前年比でみると、6月は、連鎖基準、固定基準ともに0.5%上昇した。

「生鮮食品を除く総合」（いわゆる「コア」）は、このところ上昇テンポが鈍化している。6月は、連鎖基準、固定基準ともに前月比0.1%下落した。

物価の上昇を予想する世帯の割合を「消費動向調査」（二人以上の世帯）でみると、6月は前月比0.9%ポイント上昇し、87.9%となった。

先行きについては、消費者物価（生鮮食品及びエネルギーを除く総合）は、当面、緩やかに上昇していくことが見込まれる。

株価（日経平均株価）は、21,300円台から21,000円台まで下落した後、21,700円台まで上昇し、その後21,400円台まで下落した。対米ドル円レ

ート（インターバンク直物中心相場）は、108円台から107円台まで円高方向に推移した後、108円台まで円安方向に推移し、その後107円台まで円高方向に推移した。

株価（日経平均株価）は、21,300円台から21,000円台まで下落した後、21,700円台まで上昇し、その後21,400円台まで下落した。

対米ドル円レート（インターバンク直物中心相場）は、108円台から107円台まで円高方向に推移した後、108円台まで円安方向に推移し、その後107円台まで円高方向に推移した。

短期金利についてみると、無担保コールレート（オーバーナイト物）は、-0.07%台から-0.06%台で推移した。ユーロ円金利（3ヶ月物）は、0.0%台で推移した。長期金利（10年物国債利回り）は、-0.1%台で推移した。

企業金融については、企業の資金繰り状況におおむね変化は見られない。社債と国債との流通利回りスプレッドは、総じて横ばいとなっている。金融機関の貸出平残（全国銀行）は、前年比2.4%（6月）増加した。

マネタリーベースは、前年比4.0%（6月）増加した。M2は、前年比2.3%（6月）増加した。

（※ 6/19～7/19の動き）

4. 海外経済

世界の景気は、アジア及びヨーロッパの中では弱さがみられるものの、全体としては緩やかに回復している。

先行きについては、全体としては緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、通商問題の動向、中国経済の先行き、政策に関する不確実性、金融資本市場の変動等によるリスクに留意する必要がある。

アメリカでは、景気は着実に回復が続いている。先行きについては、着実に回復が続くと見込まれる。ただし、通商問題の動向及び影響、今後の政策の動向及び影響、金融資本市場の変動の影響等に留意する必要がある。

2019年1－3月期のGDP成長率（第3次推計値）は、個人消費や設備投資が増加したことなどから、前期比年率3.1%増となった。

足下をみると、消費は増加している。設備投資は緩やかに増加している。住宅着工はおおむね横ばいとなっている。

生産は弱い動きとなっている。雇用面では、雇用者数は増加して

おり、失業率は低下傾向にある。物価面では、コア物価上昇率はこのところやや低下している。貿易面では、財輸出はこのところ弱含みとなっている。

6月18日～19日に開催された連邦公開市場委員会（FOMC）では、政策金利の誘導目標水準を2.25%から2.50%の範囲で据え置くことが決定された。

アジア地域については、中国では、景気は緩やかに減速している。先行きについては、当面は緩やかな減速が続くことが見込まれるが、各種政策効果が次第に発現することが期待される。ただし、通商問題の動向及び影響、過剰債務問題への対応、金融資本市場の変動の影響等によっては、景気が下振れするリスクがある。

韓国では、景気はこのところ弱い動きとなっている。台湾では、景気は弱めの回復となっている。インドネシアでは、景気は緩やかに回復している。タイでは、景気は緩やかに回復しているが、一部に弱い動きもみられる。インドでは、景気回復は緩やかになっている。

中国では、景気は緩やかに減速している。2019年4－6月期のGDP成長率は、前年同期比6.2%増となった。消費は伸びがやや低下している。固定資産投資は伸びがおおむね横ばいとなっている。輸出は減少している。生産は伸びがやや低下している。消費者物価上昇率はこのところおおむね横ばいとなっている。

韓国では、景気はこのところ弱い動きとなっている。台湾では、景気は弱めの回復となっている。2019年1－3月期のGDP成長率（前期比年率）は、それぞれ1.5%減、2.3%増となった。

インドネシアでは、景気は緩やかに回復している。タイでは、景気は緩やかに回復しているが、一部に弱い動きもみられる。2019年1－3月期のGDP成長率（前年同期比）は、それぞれ5.1%増、2.8%増となった。

インドでは、景気回復は緩やかになっている。2019年1－3月期のGDP成長率は、前年同期比5.8%増となった。

ヨーロッパ地域については、ユーロ圏では、景気は一部に弱さがみられるものの、緩やかに回復している。ドイツでは、景気は一部に弱さがみられるものの、持ち直しの動きがみられる。先行きについては、基調としては緩やかな回復傾向で推移することが期待される。ただし、通商問題の動向が世界経済に与える影響、政策に関する不確実性の影響等によっては、景気が下振れするリスクがある。

英国では、景気は弱い回復となっている。先行きについては、弱い回復

が続くと見込まれる。ただし、EU離脱問題の動向によっては、景気が下振れするリスクがある。

ユーロ圏では、景気は一部に弱さがみられるものの、緩やかに回復している。2019年1-3月期のGDP成長率は、前期比年率1.8%増となった。消費は緩やかながら増加している。機械設備投資は緩やかに増加している。生産は弱い動きとなっている。輸出はおおむね横ばいとなっている。失業率は低下傾向にある。コア物価上昇率はおおむね横ばいとなっている。

ドイツでは、景気は一部に弱さがみられるものの、持ち直しの動きがみられる。2019年1-3月期のGDP成長率は、前期比年率1.7%増となった。

英国では、景気は弱い回復となっている。2019年1-3月期のGDP成長率は、前期比年率2.0%増となった。消費は増加のテンポが緩やかになっている。設備投資は弱い動きとなっている。生産はおおむね横ばいとなっている。輸出はおおむね横ばいとなっている。失業率はおおむね横ばいとなっている。コア物価上昇率は安定している。

欧州中央銀行は、6月6日の理事会で、政策金利を0.00%で据え置くことを決定した。イングランド銀行は、6月19日の金融政策委員会で、政策金利を0.75%で据え置くことを決定した。

国際金融情勢等

金融情勢をみると、世界の主要な株価は、アメリカではやや上昇、英国、ドイツ及び中国ではおおむね横ばいで推移した。短期金利についてみると、ユーロドル金利（3か月物）は、やや低下した。主要国の長期金利は、アメリカ、英国及びドイツではおおむね横ばいで推移した。ドルは、ユーロ及びポンドに対しておおむね横ばい、円に対してやや減価した。原油価格（WTI）は上昇した。金価格は上昇した。